The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「生きている生」は、感じとる
Author(s)	春木, 有亮
Citation	待兼山論叢. 美学篇. 2006, 40, p. 27-50
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/11861
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「生きている生」は、感じとる

春 木 有 亮

はじめに

エチエンヌ・スーリオ〔Étienne Souriau〕(1892〜1979) は、フランス美学の泰斗である。しかしながら、その処女作『生きている思考と形式が完全であること〔*Pensée Vivante et Perfection Formelle*〕』(以下、『生きている思考』) (1925年) のなかでスーリオが直接にあつかったのは、美や芸術の問題ではなく、生〔vie〕の問題であった。同書でスーリオは、いかにして「生きている生〔la vie vivante〕」が可能になるかを問う。

「生きている生」は、スーリオにとって、いわば真の生とも言うべき生である。生きている生は、生の主体が、いま、ここという瞬間〔instant〕の生を実感する、その実感の内容そのものである。ただし、瞬間が幅を持たない以上、瞬間において、瞬間の生と、それを実感する生の主体を分かつことができない。したがって、瞬間において生の主体は虚構とならざるを得ない。生の主体なき生、そのような生をスーリオは生きている生であるとは認めない。かといって、諸々の瞬間とは別の次元に、ある生の主体を設定し、その主体がそれぞれの瞬間を移ろい、瞬間の生を所有していく、という図式をスーリオは据えない。なぜなら、瞬間の外部に設定される主体が所有できるのは、瞬間を離れた、現実でなくなった「ある生きられた生〔une vie vécue〕」でしかないからである。よって、瞬間の外部に居る生の主体は、生きている生の主体ではないという意味で、虚構となる。

生きている生は、一方で、生きる主体の同一性を確保しなければならず、他方で、主体が成立する余地のない瞬間の内に在らなければならない。いかにしてこの二律背反を克服するか、それがスーリオの最初の問いであった。スーリオは自分の問いを、「どのようにして、熱意〔Ferveur〕と明晰さ〔Lucidité〕を一つにすること、熱意と明晰さを一点に集めることができるか」(PV. XIII 頁 8 行) と言い表す。ここで熱意とは、生の主体が自分に固有の生を所有することによってまさに主体たらんとする契機であり、他方で明晰さは、生が現実であることを保証する契機である。スーリオにとって、現実は瞬間の内部に在る。よって、生きている生が実現するのは、ある主体がある瞬間の内部で、自分の生を所有するときである。主体と客体の区別が発生する余地のない瞬間という次元において、主体が生を所有するという事態が可能であるためには、生の主体が、主客の区別を前提としてはならない。言い換えれば、生きている生の主体は、主体が所有する生そのものであり、逆に生そのものが生の主体でもある。その意味で、生きている生とは、文字どおり、ある主体が生を生きるのではなく、生が生きている〔vie vivante〕事態であると言える。生きている生が実現するとき、生の主体、生、さらに両者の発生の現場である瞬間の三者は、分かたれながらも一致する。

生きている生を実現するためのポイントは、主体が、自分を、したがって自分が依って立つ瞬間を俯瞰するような位置に立たないことである。それがすなわち瞬間の内に居ることであり、そのことによって、生の主体と生が一致しているにもかかわらず、生の主体が生を所有することができる。つまり、生の主体にとって生は、自分の内部で、自分とは異なるもの、自分を越えて在るものとなって現れる。その結果、生きている生は、生の主体にとって、自分自身でありながらも、ある意味で対象であるという二重の在りかたを獲得する。そして、生の主体は、自分の内部で自分を越えて

在るものに触れることによって、生が現実であると確信する。すなわち生は、熱意と明晰さをともに得る。スーリオが、主体が自分の（意識の）内部に留まるという視点を据えることからわかるとおり、スーリオの発想の直接の源の一つは、フッサール〔Edmund Husserl〕（1859～1938）の現象学である[1]。スーリオはとりわけ、フッサールから借りた「イデアシオン」の語を軸にして、生きている生の考察を展開する。

本稿の目的は、これまで省みられることのすくなかったスーリオの思索、とりわけ美学以前（いわばスーリオの最初の美学書である『来るべきは美学〔*L'Avenir de l'Esthétique*〕』（1929年）以前という意味で）の思索を分析し、検討することである。その結果、古いタイプの形而上学とみなされがちなスーリオの思想が、現象学以後の20世紀の思想の流れに掉さすものであることがみてとられるであろう。スーリオは「形式〔forme〕」や「素材〔matière〕」といった使い古された用語を多用するが、その用法は、つぶさに検討すれば、まったく独特であるとわかる。本稿では、おもにスーリオの処女作『生きている思考』を参照し、スーリオが、いかにして生の問題にとりくんだか、そして、いかにして生の問題が美学、芸術学の問題へと転化するのか、を示す。

第1節　生きている生

『生きている思考』は、以下の文章ではじまる。「ある語が、今世紀初頭に、人間についての思索に用いられる諸々の語のあいだで呪文のように〔magique〕響くかにみえた。すなわち、生〔La Vie〕という語である。」（PV. V頁1行）スーリオの言うとおり、19世紀後半から20世紀はじめに、生きること、および生命にかかわる思索を展開したひとたちがすくなからずいた。まず、ニーチェ〔Friedrich Wilhelm Nietzsche〕（1844～1900）をはじめとするいわゆる「生の哲学」を展開したひとたちがいた。フランス

では、ベルクソンの哲学が生の哲学の代表である。生の哲学の一つの特徴は、生の豊かさは理性の側面からのみではとらえられきれないとしたことである。スーリオが、生という語が「呪文のように」響いた、と言い表す状況は、言い知れぬ深さを持った生という主題が多くのひとを魅惑していた状況である。そもそも生はなんであるか。スーリオの考えもまた、そこから出発する。

生をとらえることは可能か、とスーリオは問う。スーリオにとって、「生きること〔vivre〕」は、「生きていると感じること〔sentir qu'on vit〕」であり、生は「存在することの味わい〔saveur de l'être〕」である。そのとき、生を、その「根元〔racines profondes〕」からとらえようとすることは、「間違い〔erreur〕」であり、「不毛〔stéril〕」であることになる。その理由はつぎのようである。存在することを突きつめれば、「存在することは、際限なく分けられ」(PV. V 頁16行)、「いま、ここ〔*hic* et *nunc*〕」に存在することに行きつく。つまり、生が存在することの味わいであるかぎり、生を根元からとらえるには、いま、ここにある生をとらえなければならない。「すなわち、過ぎ去る瞬間にかじりつく〔mordre〕という生きかた」〔PV. V 頁25行〕で生きなければならない。ところが、いま、ここという「瞬間〔instant〕」においては、生を実感することはできない。なぜなら、ある瞬間に存在することは、その瞬間には実感できないからである。ある瞬間は、つねに「わたし〔moi〕」にとっては失われており、「わたしのもの〔mien〕」ではない。よって、いま、ここをとらえることはできず、いま、ここにおける生をもまたとらえることはできない。

他方で、スーリオは、「あるわたし〔un moi〕」において、それぞれの瞬間をふり返り、混ぜあわせることができるという考えかたを吟味する。「わたし」において、それぞれの瞬間がふり返られるとき、瞬間は、「現に在るもの〔l'actuel〕」の外へと移しかえられる。よって、「わたし」にお

いて瞬間がふり返られ、集められるかぎり、瞬間は瞬間ではない。他方で、「わたし」もまた、瞬間をふり返り、集めた結果できるので、瞬間ではない瞬間によって支えられていることになる。瞬間の生が失われるとき、「わたし」自身は、「現実ではなく〔irréel〕」、「実在しておらず〔inexistant〕」、「理念によって構築されたもの〔construction idéale〕」である。ところがスーリオにとって、現実ではない（すなわち単に理念のみに基づく）生は真の生ではない。スーリオはまず、「現実の宇宙〔univers réel〕、そこに実体を足したり、そこから実体を引いたりし得ない現実の宇宙のまっただ中にこそ、生を構築し〔construire〕なければならない」（PV. VI 頁27行）と考えるからである。

生を根元からとらえようと瞬間の生を求めれば、瞬間において、とらえる主体は消える。かといって、主体という枠を設定し、主体のなかにもろもろの瞬間をとりこめば、瞬間は現実ではなくなり、主体も生も現実のものではなくなる。そのとき、「ある生きられた生〔une vie vécue〕」をとらえることしかできない。スーリオが求めるのは、「生きている生〔la vie vivante〕」である。スーリオは、生きている生は現実であり、「ある所与をとらえることができないのと同様に、生きている生をとらえることはできないと考える。ただし、生きている生には、ある現実〔une réalité〕そのままの地位を超えるものがなにかしら必要であると考える。」（PV. VI 頁13行）。つまり、生きている生は、一方でだれのものでもない瞬間に在るという意味では所与であるが、他方で、諸々の瞬間を横切る生の主体によって構築されるという意味では、たんなる所与ではない。したがって主体の側から言えば、いかにして「ある現実の本質である、局所に限る〔localisation〕という定めを越えながらも、ある現実の味わいを失わない」（PV. VI 頁15行）で生きられるかを知ることが、生きている生を実現するための鍵である。つまりいかにして、生（なま）の現実でありながらも、かつ自分

で構築する生を生きることができるのか。スーリオは「あるのはただ一つの生きかただけ」であると言う。すなわち、「過ぎ去る瞬間にかじりつ」(PV.V頁26行) き〔mordre〕つつも、「いま、ここの魅惑を壊」し、「遍在〔ubiquité〕によって生きる」(PV.VI頁3行) 生きかたである。スーリオによれば、そのような生きかたは、「形式をみる〔formel〕観点、なにかを構築する〔architectonique〕観点、つまり、理性にかなう〔rationnel〕観点から」(PV.VI頁29行) のみ可能である。

「理性にかなう観点から」、どのようなしかたで生きている生が可能になるのか。スーリオはそのことを言うために、以下の五つの命題を主張しなければならないとする。(PV.X頁37行)。

1. 認識〔connaissance〕の必要かつ十分な道具は理性〔raison〕である。
2. 理性とは、われわれのイデアシオン〔idéation〕の結果出てくるもののなかから、いくつかの永続する形式〔forme perpétuelle〕という特徴を持つものを選び、自覚しながら利用することである。
3. 永続する形式は、さまざまな実体〔substance〕によって支えられることができる形式である。
4. ある形式が、実体という統一体〔unité〕を越えるかどうかの基準は、主観が、完全であること〔perfection〕の印象を持つかどうか、知性を休ませて気持ちよくなっている〔plaisir en repos de l'intelligence〕かどうかである。
5. 理性によって生きることとは、いくつかの、様式となった形式〔forme stylisée〕において考えることである。

以下、これら五つの命題を適宜に参照しながらスーリオの考えをみていく。

第2節　理性にかなうもの

スーリオが言う「理性にかなう観点」をどのようなものであるかを知るには、スーリオの言う「理性〔raison〕」がどのようなものであるかを確認しなければならない。しかし、スーリオは、「理性」の意味によって「理性にかなう」の意味を決めるのではなく、逆に、「理性にかなう」の意味によって、「理性」の意味を決めるべきだと考える。スーリオによれば、「理性」は、「理性にかなうものを生みだす、もしくは評価するための諸々の条件〔condition〕」(PV. VI 頁37行) である。つまり、まず、あるものが理性にかなっており、別のものは理性にかなっていないと判断する状況があり、そのような状況が成立するためには、理性（という条件）が在ることが要求されなければならない。そして、理性にかなっているものの集合は「学問（科学）〔la Science〕」と呼ばれるので、理性そのものがなにであるかわからなくとも、理性の「はたらき〔fonction〕」は学問、あるいは「同一性〔l'identite〕」を要求し、構築することであるとスーリオは考える。では理性を知るために、学問が構築される過程を研究すればよいかといえば、そうではない。なぜなら、日常のなかでなにかを実践するために思考することが専門化され、かたちをとると学問になる。ゆえに学問の根は、学問ではない日常のなかにあるとスーリオは考えるからである。よって、スーリオは、理性にかなうものがどのようなものであるかを知るために、命題2.にあるとおり、「日々、素朴なかたちでおこなうイデアシオン〔idéation journalière et naturelle〕」を研究すべきであると考える[2)]。

第3節　イデアシオンと、理性にかなうしかたで考えること

スーリオは、生きることは「精神によって、精神のために〔par et pour l'esprit〕生きること」(PV. V 頁4行) であるという前提から、「われわれ

は、われわれ自身の思考の世界のなかで生きる」(PV. 3 頁 7 行) とする。ただしスーリオは、思考は、感じることができる世界〔monde sensible〕とのつながりを失うことによって、「明晰に〔lucide〕」なるのではなく、「あいまいに〔obscur〕」なると考える。スーリオにとって、「われわれの思考の価値と値うち〔la valeur et le prix〕はわれわれの外に在る〔extrinsèque〕」(PV. 3 頁33行)。つまり思考は、思考の内部で完結するのではない。そこで「イデアシオン」が必要となる。スーリオのイデアシオンという考えかたは、基本的にフッサールのそれを踏襲している。フッサールにおいてイデアシオン (イデアチオン) は「本質直観」とほぼ同義である。本質直観は、個別のものの経験、およびそれに付随する想像や連想による変更を経た後に変わらぬ本質、あるいは理念 (エイドス) を観ることである。本質直観の過程では、直観の主体が想像によって、個別の事例のさまざまなヴァリエーションをつくる。つぎに、主体が本質を積極的に抽象するのではなく、諸々のヴァリエーションの側で総合が生じた結果、おのずと本質が構成される。本質直観に含まれる、この主体にとっての受動的な契機が、直観される本質が主体の意識のいわば向こう側からやって来ることを示す。本質直観に際しては、意識の外にあるいわゆる客観的な現実をあらかじめ想定しはしない。意識の向こう側とは、あくまで意識の内部で意識にとって他者となって現れてくるという意味での意識の外側である。

よってスーリオにとって、イデアシオンは、思考が思考の外とかかわるための鍵となる。スーリオによれば、イデアシオンの至上の目的は、「ある限られた過程〔processus〕」であり、その過程の途中で「われわれが、自分の思考から切り離され、諸事物の世界へ向けられる」(PV. 4 頁11行)、そのような過程である。よって、イデアシオンの目的は、「観想〔contemplation〕」や「自分を静かに所有すること〔possession tranquille de nous mêmes〕」のような「ある状態〔état〕ではなく、ある行為〔acte〕である」

(PV. 4 頁22行) ことになる。そして、イデアシオンの目的である行為とは、「理性にかなうしかたで考えること〔raisonnement〕」である。

理性にかなうしかたで考えることは、「効率〔éfficasité〕」を高めることである。たとえばある目的地に行く際に、どの道を通れば、どのような結果になるのかについて、ひとは「想像力〔imagination〕」を用いて思考する。しかし、ただやみくもに想像をめぐらすだけでは、最善の道を見つけだすことはできない。あくまで「現実〔réalité〕と結びつい」〔PV. 9 頁 3 行〕た想像をめぐらさなければならない。現実に即したかたちで想像力をはたらかせること、つまりうまくイデアシオンができるほど、最善の道を選び出すことができる。

客観的な現実をあらかじめ想定しないイデアシオンにおいて、ある想像が現実に即するとは、思考の内部で思考が一貫することである。よってスーリオは、理性にかなうしかたで考えることには、いわば「脊椎〔épine dorsale〕」が必要であると言う。脊椎とは、「厳密に連鎖をつくっていくさいの原理〔principe d'enchaînement rigoureux〕」である。すなわち理性にかなうしかたで考えるには、思考が連鎖しなければならない。

第 4 節　対象と事物

思考を連鎖させるものはなにか。思考が進む以上、思考はどこかに向かって進まなければならない。とすると、思考が向かう対象が思考に脊椎を与えると考えられる。そこでスーリオは、リニャーノ〔Eugenio Rignano〕(1870〜1930〕の考えかたを引きあいに出す (PV. 22頁25行)。リニャーノは、たとえば三角形の内角の和を求めるための「推論〔raisonnement〕」を行うときに、思考が一貫して持続するためには、三角形の内角の和へと「情緒が向かい〔tendance affective〕」続けなければならないと言う。リニャーノにとっては、「ある特定の対象〔objet〕のなりゆきを追い求める

……(中略)……情緒のはたらき〔affectivité〕」(PV. 23頁5行) が推論のつながりを支える思考の脊椎である。ただしスーリオがリニャーノを引用するのは、それを批判することをとおして自分の考えをきわ立たせるためである。

スーリオは、まず「対象〔objet〕」という語に着目する。対象という語には、二つの意味があると言う。一つ目の意味は、「事物という意味での対象〔l'objet-chose〕」である。事物という意味での対象は、「ある現実の対象〔un objet réel〕」である。二つ目の意味は、「主題という意味での対象〔l'objet-théme〕」である[3)]。主題という意味での対象は、「ある傾向の目的〔fin d'une tendance〕」である。いわばなにかの対象となっているobejtである。リニャーノが対象と言うとき、対象は情緒が向かう目的であるので、リニャーノは対象という語を二つ目の意味で使っていると言える。他方でリニャーノは、「理性にかなうしかたで考えることとは、思考において、ある事物の物語〔histoire〕を追いかけることである」(PV. 21頁26行) とも言う。よってスーリオは、リニャーノが、「主題という意味での対象」と「事物という意味での対象」とを混同している、あるいは両者がつねに一致すると考えていることを批判する。スーリオにとっては、理性にかなうしかたで考えるときに思考が追いかけるべきは、「主題という意味での対象」ではなく、「事物という意味での対象」である。さらに、対象には二重の意味があってややこしいのであるから、もっぱら「主題という意味での対象」を対象と呼び、「事物という意味での対象」を単に事物と言い換えればよいとスーリオは考える。より簡潔に言えば、スーリオにとって思考が追いかけるべきは、対象ではなく、事物である。

思考が対象に向かうと言う場合と、思考が事物に向かうと言う場合ではなにが異なるのか。先にみたように、リニャーノが言う対象は、そもそも向かわれることを前提とする。つまり、向かうことがなければ、対象もな

い。よって、リニャーノは、思考の脊椎を、対象そのもの（つまり、スーリオの言う事物）ではなく、情緒のはたらきに担わせることになる。しかし、スーリオによれば、情緒のはたらきによって、思考を支えることはできない。ある情緒がつねに同じ対象に向かう保証はないからである。あるいは、情緒は対象を持たないこともあり得る。スーリオはたとえば、好きな女を追いかける男を想定する[4]。男がある女に恋心を抱き、女を追いかけるとしても、同じ恋心を別の女に抱くかもしれない。男はつねに恋をしているが、恋の相手は同じではない。つまり好きだという同じ情緒を持ち続けていても、行き着く対象は同じではない。よって、「変わらぬ愛は、ある意味でずっと移り気である」（AE. 120頁10行　スーリオがラ・ロシュフーコー〔La Rochefoucauld 1613〜1680〕を引用している。）。男の恋心の対象はじつは恋心そのものであって、男はたえず、好きな女を好きになっているにすぎない。よって、情緒はそもそも具体的な対象（すなわち事物）を持たずにわき起こる場合があると言える。

思考の脊椎は、思考の内部の流れに左右されない「安定した統合力〔cohésion stable〕」を持たなければならない。よって、思考が現実に即している、すなわち理性にかなっているという保証を手にいれるためには、思考の対象は、思考の外に在る（と思考の内部で想定される）事物でなければならない。

第5節　事物と形式

事物は思考の外に在り、「対象が『事物であることによって』その対象が同一であるという同一性〔identité objective «chosale»〕」を持つ。「対象が『事物であることによって』その対象が同一である」と言うことができるのは、事物が同一性を持つというよりは、事物が同一性そのものであるからである。他方で、思考が現実に即して流れるためには、思考自身が、

脊椎、つまり、「つねに同じであるもの（こと）〔constance〕」を含まなければならない。スーリオは、思考は実質上、イデアシオンの連続であると考えるので、先に述べた思考の連鎖とは、実質上は理念〔idée〕の連鎖である。よって、思考の脊椎であるつねに同じものとは、つねに同じ理念である。思考の外側に在る事物の同一性が、どのようにして思考の内側でみてとられる理念の同一性にすりかわるのか。思考が事物を追いかけるといっても、思考は、あくまで思考の外側に在る事物を直接に追いかけることはできない。したがって、思考の外側にある事物が、どのようなかたちで思考の内側に現れてくるかを問わねばならない。

思考の外に在る事物と思考の内に在る理念をつなぐのが、「形式〔forme〕」である。思考が事物を追いかけるとき、思考は、事物の「本質である形式〔forme essentielle〕」を用いるとスーリオは言う。その意味で、形式は事物の形式である。他方で、イデアシオンによって直観される理念を、スーリオは命題2.において、「永続する形式という特徴を持つもの」と呼んでいる。その意味では、形式は理念の形式である。つまりスーリオは、形式は、事物と理念の両方にまたがる。逆に言えば、ただ形式が在り、事物と理念はそれぞれ、形式の一側面である。形式は思考の内側に在るととらえられるときに理念と言われ、思考の外側に在るととらえられるときに事物と言われる。そしてイデアシオンが達成されるとは、事物と理念、そして形式の三項が一致することである。

したがって形式は、「思考の中に位置する原理」（PV. XVII 頁 6 行）とも言われる。「対象がつねに同じであること〔les constances objectives〕が、安定した支点を思考に与えるのではまったくない。対象がつねに同じであることが、思考に対して安定した支点を要求する」（PV. XII 頁35行）。つまり、本質である形式は、事物の本質（あるいは事物という本質）でありながらも、あくまで思考が能動的に「鍛えあげる〔forger〕」ものでもある。

しかしこれでは、元のもくあみではないか。思考が流れ、変化する以上、思考自身がつくる形式によって、つねに変わらない理念を「保つ〔garder〕」ことを保証できないからである。思考がつくる形式は、いかにして理念の同一性を生むか。

スーリオは、思考は、ある理念をつねに同じに保つのではなく、つねに同じであるように「つくりなおす〔refaire〕」と言う。思考は、ある理念を「永遠に復元すること〔perpétuelle reconstruction〕」により、つねに同じ理念をつくりだす。ある理念が同じその理念であるとわかる「基準〔critère〕」はなにか。ある理念が、過去に在った理念と比べて同じであるかどうかということではない。命題4.にあるように、理念の「形式が完全であるという印象〔impression de perfection formelle〕」(PV. 262頁10行)である。ある理念の形式が完全である場合、その形式は完全であるかぎりで、「不変である〔invariance〕」からである。完全であるという印象を受けるとき、思考は、「創りだすこと〔invention〕」も、「思い出すこと〔remémoration〕」もやめる。完全であるという印象は、いわば完全和音であり、「休止〔repos〕」をもたらす。理性にかなうしかたで考える方式の第4の命題にあった、「知性を休ませて気持ちよくなっている〔plaisir en repos de l'intelligence〕」とは、イデアシオンの受動の契機とかかわる。つまり本質が現われるとき、思考は「確信〔certitude〕」を得て、もはやなにも手を出さずに、すなわち休み、本質をなかば受動的に把握する。ゆえに形式が完全であるという「印象〔impression〕」が、思考の同一性の基準となる。つまり完全さは、思考の外側から、内側へ刻まれる。ただし、完全であるという基準は、思考の外から「贈られる〔s'offrir〕」かのように、やはり、思考の内部で「つくられ〔fait〕」る。完全であるという基準が、思考が自分の内につくる基準である以上、形式が完全であることは、つねに、「あるしかたで完全であること〔une perfection〕」でしかない。

形式があるしかたで完全であることは、言い換えれば、形式が、ある瞬間にかぎって完全であることである。なぜ、諸々の瞬間にかぎって完全であることが、諸々の瞬間を突き抜ける同一性に行きつくのか。スーリオによれば、それぞれの瞬間において主体がつくる完全な形式は、「自分の内にたがいにつながる原理〔principe de leur enchaînement〕を持っている」(PV. 272頁12行）からである。つまり、完全な形式は、あるしかたで完全でしかないが、完全であることにより、他のしかたで完全な形式と「相似〔similitude〕」であることにより、つながることができる。ゆえに、生きる主体は、それぞれの瞬間において完全な形式をつくることにより、そしてそのことによってのみ、「自分の存在の本質を、瞬間から瞬間へ運」び、「それぞれの瞬間にまるごと自分自身であること」(PV. 264頁 1 行）ができる。生きる主体は、瞬間の内に居ながら、瞬間同士をおのずと連続させるかたちで、自分の生を統一する。

第 6 節　生と自由

スーリオのこのような生のとらえかたにみられる問題意識を二つに整理することができる。なにを目指して生きるのかという問題、そして、いかにして自分の生を生きることができるかという問題である。

スーリオは、生の価値が、「変わるもの〔ce qui change〕」のなかにあると考えることを批判する。生の価値が変わるもののなかにあると考える場合、「本質である〔essentiel〕形式」は、「目指す〔tendre vers〕べき形式」である。よって、生きる主体は、「永遠に自分を追跡」(PV. 269頁 3 行）し、「無限に未知の未来の状態にあこがれ続ける」(PV. 269頁 3 行)。しかし、「けっして自分の形式を見つけなかった生は、いったいなにであるのか。」(PV. 269頁 9 行）

スーリオは、「自分の前に〔en avant de soi〕」ではなく、「自分の内に

〔en soi〕」、「自分の存在意義〔raison d'être〕をもとめる」べきだと考える。ただしそれは、生きる主体が好き勝手に生きることではない。スーリオにとって、単に好き勝手に生きることは、「意志〔volonté〕」によって生きることである。それに対して、生きている生を実現することは、スーリオにとって、「自由であること〔liberté〕」である。自由は、完全な形式がもつ「明晰さ〔lucidité〕」から生まれる。明晰さは、「現に在るのもののしるし〔marque de l'actuel〕」(PV. 270頁17行)である。自由はまた、「われわれの本質が形式によって、現われる〔se manifester〕瞬間を支配する」(PV. 270頁24行)ことによって、「われわれ自身の生が、ある具体的なもの〔un concret〕と同化すること」(PV. 270頁25行)である。つまり自由は、生と生の主体、言い換えれば、理念と現実の一致により成り立つ。それに対し、意志は「一種の力〔une force〕」であるとスーリオは言う。ある力があるということは、ある抵抗がはたらいているということである。抵抗は、理念と現実が分離し、食いちがうことから生じる。したがって、生の主体が意志を持つかぎり、理念は現実と一致しておらず、生きている生は実現しない。

スーリオは、『生きている思考』の第二版の前書きで以下のように言う。「(本書で＊かっこおよびかっこ内は論者による。)とくに示そうとしたことは――(中略)――自分自身に対して根本から忠実であること〔fidélité〕と、生の丸みを帯びた輪郭〔galbe〕が、ある最も波乱に富んだ〔aventureux〕ものに開かれるということがどのように関係するか、であった。生の丸みを帯びた輪郭が、最も波乱に富んだものに出くわすのは、あらかじめわかっている計画〔projet〕をたどるのではなく、未来になにが来るかわからぬまま道のり〔trajet〕を行くなかで、である。」(PV. XIII 頁23行)「忠実であること」は、「真に生の名に値する生の基礎となる行為」(PV. 273頁9行)であり、「どんな意外な出来事〔aventure〕がおこっても、ど

んな不意の出来事〔survenance〕がおこっても、調和と完全によってあらゆる衰退、ゆがみから守られるこれらの形式のうちの一つ形式を維持すること」(PV. 273頁 8 行) である。ただし、じっさいには、意外な出来事が起こらないようにすることはできない。むしろ、自分に忠実であることによって、「明晰さとともに生き」、「短い意外な出来事のもろもろの瞬間を生きる。」(PV. 272頁15行) よって計画をたどることは、正確に言えば、意外な出来事を排除すると言うよりは、つぎつぎに起こる意外な出来事を、形式を用いて、自分のものにすることであろう。計画をたどることは、先に述べたような、たえず自分ではない自分を求めることとはちがう。たえず自分ではない自分を求めるひとは、それぞれの瞬間を自分のものにできないので、意外な出来事を、意外な出来事のまま生きることになる。計画をたどる過程では、自分の本質は自分の内に在る。なぜなら、計画をたどることもなにかを目指すことであるが、計画をたどる場合には、「することができること〔*un* pouvoir faire〕が、存在しなければならないこと〔*un* devoir être〕、そして、そのようでなければならないこと〔*un* devoire être tel〕含む」(PV. XIII 頁 9 行) からである。

第 7 節　生と存在

実現されるべき計画を立てるからといって、生きるべき生があらかじめ用意されているわけではない。先述のとおり、自由は生が具体的なものと同化することであるが、具体的なものは、生を離れて別個に在るわけではない。スーリオにとって、「形式をつくること〔information〕」はあらかじめ在る素材に形式を与えることではない。「形式をつくら〔infromation〕なければ、素材は素材ではないか、あるいは、素材はまったく存在しないであろう」(PV. 270頁28行) からである。すなわち、「ある形式がある素材を所有すること〔possession〕と、ある素材がある形式に満ちること

〔emplissement〕は、(同じ＊かっこおよびかっこ内は論者による。) 一つの事柄〔un fait〕である。」(AE. VII 頁14行) 命題3において、完全な形式が実体〔substance〕を持つとはその意味で、である。完全な形式は、完全である時点ですでに「素材〔matière〕」と結合するための場である実体を備える。

ゆえに形式が完全であるとき、形式はもはや素材であると言え、さらには、形式と素材からなる事物そのものでもあると言える。形式が事物であるいうことは、形式が在るところに、現実が開けるということである。このことを、モブレイ〔Luce de Vitry Maubrey〕は「形式が、秩序のないある現実〔réalité acosmique〕が秩序をもつかたちで現われることであるとすれば、形式は、存在〔l'être〕を認識するさいの素材である。」(*La Pensée Cosmologique d' Étienne Souriau* 195頁22行) と言う。その場合、形式は「自分からはたらきかける素材〔matière active〕」である。すなわち、現実に秩序を与えると同時に、秩序を持った現実が現われるための「厚み〔*epaisseur*〕」を提供する。

本来素材や実体の厚みとは切り離された概念である形式が厚みを持つとは、厳密にはどのような事態であるか。それはあたかも、本来幅を持たない瞬間の内で、生きている生が実現する事態と同様である。スーリオが『神の影〔*L'Ombre de Dieu*〕』(1955年) のなかで提出する patefit という考えかたは事態をよく説明している。patefit という考えはデカルトのコギトに対する批判である。デカルトが、「わたしは考える、ゆえにわたしは存在する。〔Cogito ergo sum. /Je pense, donc je suis.〕」と言うとき、デカルトのコギト (わたしは考える) は、考えるという「行為〔faire〕」とわたしという行為の主体を含んでいる。スーリオは、考えるという行為そのものと、考える主体は別であり、同時に発生するわけではないと考える。よって、コギト (わたしは考える) 以前に、考える行為そのものがまず在

り、コギト（わたしは考える）のなかの「わたし」は、考える行為の後につけ加えられたものであることになる。よって、スーリオにとっての「第一の真理〔vérité première〕」はせいぜい、「いま考えられる、ゆえになにかが在る。〔Nunc cogitatur, ergo quid est. / il y a présentement pensée, donc quelque chose existe.〕」（OD. 97頁26行）と言い表されるにとどまる。cogitatur という受動態は、考える主体が不在であることを示している。しかし、cogitatur（考えられる）もまた、すでに考えられるという語を介した経験である。スーリオは、cogitatur 以前にも、「なににも媒介されていない〔immédiat〕」経験を想定する。よって、スーリオにとっての第一の真理は、さらに書き換えられ、「明らかである、ゆえになにかが在る。〔patefit, ergo quid est.〕」（OD. 98頁 1 行）となる。patefit は、「明らかさそのもの〔évidence même〕」であり、「そもそも経験そのものを構成しているもの〔primordialement constituante de l'expérience〕」（OD. 97頁31行）である。「考えられる、ゆえになにかが在る。」のなかの「なにかが在る」と「明らかである、ゆえになにかが在る。」のなかの「なにかが在る」は、日本語およびラテン語では同じであるが、スーリオは、フランス語では、前者を quelque chose existe、後者を il y a quelque chose と表している。後者においてスーリオは、il y a という非人称の言い回しを用いることにより、実質上の主語と動詞、すなわち行為の主体と行為が発生することを避けている。それは、スーリオが、第一の真理を、「より直接の〔plus direct〕」かたちで言い表そうとしたからである。

また、patefit 自体も非人称のニュアンスを含んでいる。モブレイによれば、patefit は、フランス語で il est manifeste を意味するラテン語であるが、il est manifeste の il は非人称主語である。patefit は、「無限に多様な形式〔formes indefiniment variées〕」（OD. 98頁 2 行）を持つことができる。patefit は、いわば未分化の形式、諸々の形式の源に在る形式である。

patefit は、主体と対象の以前に在り、むしろそこから主体と対象の区別が発生する「針先で突いた穴〔punctum〕」である[5)]。

第8節　感じとる力

以上にみてきたように、スーリオは、「生きている思考」と「形式が完全であること」を結びつける。ところが結びつけた後に、みずから、「完全であること〔perfection〕」という語は使うべきではないと言う。完全という語には、形而上学の手あかがついており、「合目的性〔finalité〕」という考えかたを呼び起こすから、である。完全であることという語の代わりに、スーリオは「様式〔style〕」という語を持ち出す。すなわち、スーリオは、「完全な形式によって思考することについて語るよりも、様式となった形式〔forme stylisée〕によって思考することについて語る。」(PV. XVIII 頁35 行)

『美学辞典〔*Vocabulaire d'Esthétique*〕』で、アンヌ・スーリオ〔Anne Souriau〕は、「様式〔style〕」の意味を四つに区別している。一つ目の意味に、たとえばある文学作家に固有の書きかたのような「独特のもの、主観的なものに基づく性質〔caractères d'origine particulière, subjective〕」(1315頁51行)を挙げ、二つ目に、たとえば、文学作品において、優雅な登場人物は優雅なしかたで語られなければならないという場合の、語るしかたである、「対象の形式上の性質〔caractères formels objectifs〕」(1315頁52行)を挙げる。それら二つの意味は、それぞれ、主観と客観、あるいは独創と規範という様式という語が持つ二つの側面を示す。そして、アンヌ・スーリオが挙げる様式の三つ目の意味は、二つの側面を兼ね備える。すなわち、「形式が完全であること〔perfection formelle〕」という意味である。スーリオが、完全であることという語をわざわざ様式という語に置き換えたのに対し、アンヌ・スーリオが様式は完全であることと説明するのは、スー

リオの意図を無にする還元である。しかし、逆に、アンヌ・スーリオが、スーリオの論を踏まえていることのあらわれであると言える。アンヌ・スーリオによれば、「風格がある〔avoir du style〕」という言いまわしのなかで使われる場合のstyleは、完全な形式の意味を持つ。「風格がある」は、「ある様式を備える〔avoir un style〕」とは異なる。風格があることは、高度の「純粋さ〔pureté〕」と「明白さ〔evidence〕」を備えたある様式を備えることである。この意味での様式は、単に独特であるだけではなく、「あいまいさ〔incertitude〕」を除き、「明快な選択〔netteté dans les choix〕」によって、独特である純度が高まることにより、ある種の完全さを得る。

完全な形式は、ある瞬間の生の主体の本質であるゆえに、まず独創であり、そのうえでかつ、主体を超えた現実に触れているという意味で、ある種の客観を得て、規範にかなっている。完全という語が、形式の規範の側面を強調しがちなのに対し、スーリオは様式という語が独創と規範の両側面をともに表すことを期待したと考えられる。

様式となった形式を把握するには、思考は、「形式が確実に安定していることを感じとる力〔sensibilité〕」(PV. XVIII頁21行) を持たねばならない。というよりもむしろ、感じとる力は、精神のすべての「能力〔ressources〕」を備えており、感じとる力の延長上に、「理性にかなうしかたで考える知性〔intelligence raisonnante〕」が生まれたとスーリオは考える。さらに、この感じとる力は、歴史のなかで、「様式（この場合は「図案」でもよい＊かっこおよびかっこ内は論者による。）となった芸術〔art stylisé〕」というかたちで結晶化したとスーリオは言う。様式となった芸術がなにを指すかはじつははっきりとしないが、たとえば古代エジプト、古代ギリシャ、中世イスラム、全時代の中国の芸術に見られる、ある特定の文様である。様式となった芸術の特徴は、「自己完結している〔fermée en soi〕」(PV. 28頁21行) ことである。つまり、再現する対象という意味での

「モチーフ〔motif〕」によって左右されない。様式となった芸術について考察することは、「今世紀の芸術、すなわち、芸術がもつ最も価値のあるもの、そしておそらく最も将来に開かれているものにおいてますますはっきりと現れている諸々の傾向と調和している」(PV. XVIII 頁43行) とスーリオは議論を進めている。スーリオはここで、たとえば印象派の絵画を想定しているであろう。スーリオは、当時の芸術が、なにかを再現するという務めから逃れ、いわば自律する形式を目指していることに注目していた。そして自律する形式を用いるという点から、様式となった芸術をいわば再発見したのではないか。つまり、自律する形式は、そもそも芸術の過去から未来に通じる、芸術の最も大事な要素だと考えた。そして、芸術が自律する形式を用いる芸術は、感じとる力によってなされるという意味で、理性にかなうしかたで考えることと同じ根を持つとする。

おわりに

生とはなにか、どのように生をとらえられるのかという問いから出発したスーリオの考えは、理性、完全な形式、様式となった形式、感じとる力、芸術という経路をたどり、「美学ないし感性にかかわる考察〔considerations esthétiques〕を通じて結論を出すに至った。」(PV. XVIII 頁42行)『生きている思考』を出した4年後に、スーリオは『来るべきは美学』を出すことになる。同書以降スーリオは、本稿でみた生についての思索を基礎にして、美学、芸術学を展開していく。本稿での分析を踏まえその展開を追うことを、別稿にゆずりたい。

注記

引用文直後の（ ）内に、引用文が、なにという著作の何頁の何行目から始まるかを記した。論者が必要とみなす場合には、〔 〕内に部分的に原文を付した。

邦訳は論者による。
引用箇所を示すさいに、スーリオの著作に略号を使った。著作名の略号と著作は以下のようである。
PV: *Pensée Vivante et Perfection Formelle*
AE: *L'Avenir de l'Esthétique*
OD: L'ombre de Dieu
スーリオをはじめ他の著者の語を引用するときは、初出のさい、また必要とみなす場合のみ、「 」でくくることとした。原語は〔 〕でくくることとした。
人名の後に〔 〕を付して人名の原語を表記し、さらにその後に（ ）を付して、確認できたかぎりで生年、没年を西暦で表記した。

1) スーリオは、『生きている思考』の第二版に添えた前書きの注で、同書での研究が、その出発点においてフッサールの影響を受けていることを述懐している（PV. VII 頁33行）。
2) たとえば、「数学の論証〔raisonnement〕の本質をよく把握するには、――（中略）――数学者の巧みな思索をすばやく追うよりは、無学なひとが苦労して暗算を進めるのを観察するのがよい。」（PV. X 頁21行）という例をスーリオは挙げる。学問の行為におけるよりも、日常生活におけるイデアシオンにその根源を汲みとろうとするスーリオの態度もまた、「生活世界」が学問の基盤となっているというフッサールの考えに通じると言える。
3) ここで論者は objet を対象と訳した。しかし、対象という日本語はそもそも「主題という意味での」objet の意味を持つ。よって objet に対象という訳語を与えるかぎり、l'objet-chose の訳語である「事物である対象」は、ここでなされている議論のうえでは矛盾した表現である。しかし、objet の訳語を chose の訳語と同じ「事物」とするわけにはいかなかった。また、objet に「もの」という訳語を充てることも可能であるが、日本語では「事物」と「もの」の意味の区別がつきにくい。また、objet に「もの」という訳語を充てると、objet を対象と訳する場合とは逆に、l'objet-thème の訳語である「主題であるもの」が、意味を成さなくなってしまう。以上の理由から、論点先取を承知で、ここでは objet を対象と訳した。
4) 18世紀には、対象〔obejt〕は、恋愛の対象という意味で、「若い女〔jeune femme〕」を指すことがあったとスーリオは指摘する（AE. 119頁18行）。よって、スーリオが恋愛の対象である女のたとえ話を出すことは、

まったく恣意的であるというわけではない。

5) patefit という考えもまた、フッサールの、生活世界の「根源的な明証性」、あるいは「生活世界のアプリオリ」という考えに酷似している。

（大学院博士後期課程修了）

SUMMARY

«La vie vivante», quelque chose à sentir

Tomoaki KITADA-HARUKI

Nous essayons de suivre et analyser la pensée d'Étienne Souriau sur la problématique de «la vie».

Souriau, chef de l'esthétique française, traite du problème de la vie dans sa première oeuvre : *Penseé cosmologique et perfection formelle.*

Vivre, pour Souriau, c'est «sentir qu'on vit», goûter «la saveur de l'être» dans un instant «hic et nunc» mais également saisir sa propre vie à travers les instants. «Un moi» qui constitue ma vie n'existe pas dans les instants qui ne durent pas. De l'autre bord les instants ramassés dans un moi perdrait leur saveur de l'être. Comment peut-on construire l'unité de sa propre vie sans perdre l'actualité de la vie instantanée?

Souriau répond à la question en montrant la possibilité de «la vie vivante» caractérisée par l'unification des éléments incompatibles: «la ferveur» et «la lucidité», et s'opposant à «une vie vécue». La ferveur tente de construire et déterminer "ma vie" en saisissant les idées dans ma pensée. La lucidité tente de donner de la certitude à la vie en sentant la réalité. La vie vivante comme idéale et réelle.

Il faudrait que quelque chose puisse lier l'idée avec la réalite pour unir la ferveur et la lucidité dans la vie vivante. C'est, pour Souriau, la perfection formelle, reliant le côté intérieur de la pensée, caractère des produits de l'idéation (équivalent, pour Souriau, au raisonnement bien joué) et le côté éxtérieur, forme essentielle de la chose.

La forme est un instrument de la raison qui pour Souriau, contrairement à d'autres rationalistes, implique une sensibilité puisque la forme de la vie vivante est à la fois à saisir et à sentir. Elle est, pour ainsi dire, la raison esthétique.

キーワード：スーリオ，生，形式，理性，感性